

伝道が苦手だ

シリーズ～さよなら基督教～

2024/6/23

なぜ伝道が苦手なのか？

- 恥ずかしい
- 言っても断られるだけだ
- 人間関係が壊れる
- そもそも自分がクリスチャンであることすら話していない
- 以前はしていたがうまく行かなかったので止めた
- 伝道しなくても救われる人は救われるはずだ
- 自分がしなくても誰かがやってくれる
- 伝道は特別な賜物を持っている人がやるものだ
- そもそも何かを勧めるのが苦手だ

なぜ伝道しなければならないのか？

• イエス様のご命令だから

- 「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。」(マタイ28:19／大宣教命令)

• 自分が伝えないと伝わらないから

- ザアカイ、サマリアの女の所へ行かれたイエス様
- エチオピア人の宦官のもとへ遣わされたフィリポ

• このままだと日本からキリスト教がなくなってしまうから

- コロナの3年間で1000の教会がなくなった
- 2050年に日本基督教団が消滅する？

マルコ福音書4:3～8

「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」

そもそも伝道とは？

- 「神の言葉(福音)」を「蒔く」ことである
 - 「種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。」4:14
 - 教会に連れてきて信仰を持つまでが伝道だと考える必要は無い
- 福音の種が芽を出し、育ち、実を結ぶかどうかは土地(心)次第である
 - 種のまき方には関係が無い
- 蒔いておかないと実は結ばない！
 - その人の心が「良い土地」であるときに種があれば、信じて救われる

知らないうちに実が結ぶ

また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。**土はひとりでに実を結ばせる**のであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の 때가来たからである。」

マルコ4:26～29

これまでに3度あった収穫期

•3度の収穫期

- 戦国時代
- 明治時代
- 敗戦後

•共通すること

- 時代の変革期であった
- 国全体が混乱し、大きな不安に襲われていた

•人々の心が「**良い土地**」状態だった！

- 種(福音)を直に受け入れ、実を結ぶことができた

第四・第五の畑

- このまま「良い土地」になるのを待つのか？
 - 種まきは止めない！
- 少し耕されている畑（第四の畑）
 - キリスト教の保育園や幼稚園に通った人
 - ミッションスクールの卒業生
 - 少なくとも聖書の教えや言葉に触れたことがある
- 休眠状態の畑（第五の畑）
 - かつて洗礼を受け教会生活をしたが、ゆえあって教会を離れてしまった人
 - 数十万人にはいると思われる

福音の命を信じる

更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、**からし種のようなもの**である。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

マルコ福音書4:30～32

良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。

マルコ福音書4章20節